

韓国に生き残っている日本語について*

李 庸 憲

一 はじめに

この論文は、今現在韓国の中で日本語関係の言葉がどのくらい生き残っており、また、それがどのように使われているかを調査し、これを分析、考察することを目的とするものである。このような問題についての既存の研究は、主に辞典または文献調査を中心にしたものが多い。しかしこの研究では直接調査（インタビュー）を通じて資料を収集し、この資料をもとにして分析、考察することにする。

周知のように日本と韓国は、政治的な理由で接触を避けられない時代があった。ある民族が他の民族と相接するようになると、必然的に言語の接触も起こり得る。時間が経つにつれて文化変容も表れるようになる。それは自然なことである

*この論文は、拙稿「巨文島に残った日本語外来語」「日本植民地と文化変容」（御茶の水書房）に一部加筆したものである。

り。しかし韓国の場合はそれが自然なものではなかった。特に言葉の面では「変容」というよりも「流入」²⁾そのものであった。こういう事についてはこれ以上立ち入らない事にする。その時に「流入」してきたものが今現在どのようなふうに見えるのが目的であるからである。

調査方法としては、筆者自身が被調査者と一対一で向かい合い、あらかじめ用意した質問（もの）を与え、その回答を記録するという方法で行っていった。ただし、中には複数の被調査者に同時に質問を与えてその回答を記録したものもわずかではあるがあった。

具体的には、「日頃、あなたが使っている外来語（日本語）のようなものをすべてあげて下さい」と外来語（日本語）の説明を加えながら尋ねた。また、被調査者に具体的なものをみせ、「これはなんと言いますか」と質問したり、目の前にあるものを指さし、「あれはなんと言いますか」と質問した

りしてその回答を記録した。

インフォマントとしては、日帝時代の経験のない人を選んだ。年令が六十を越えた人の中には、若いとき日本人達を通じて日本語を聞いたり習ったりした経験があるからインフォマントとしては不適合だと思つて除外した。そこで今四十年代前後の人を対象とした。

一般用語の場合は、筆者自身を含めた筆者の弟子、友人・知人をその対象にした。専門用語の場合は、それぞれの専門分野に携わっている人を対象にした。ここで専門分野と言うのは、漁業・水産業関係、服装関係、食品関係、運送関係、印刷関係、時計関係、理容関係、ビリヤード関係、電気関係、炭坑関係、写真関係などであるが、今回は専門分野としては、漁業・水産関係に限ることにする。他の専門分野については、『日本植民地と文化変容』（御茶の水書房）を参照されたい。調査地としては、日帝時代の間、日本の影響を強く受けてその影響が今も生き残っていると思われる地域を選定し、調査することにした。これはそのような地域には日本語の影響が強く生き残っている可能性が強いからである。そこで漁業・水産業の関係の資料については、日帝時代、大勢の日本人が渡つてきて漁業前進基地として開拓した「巨文島」を調査対象とした。この「巨文島」について簡単に紹介すると次のようである。

「巨文島」は大きい三つの島からなっている。その三つの島の名前は、東島、西島、古島である。研究チームが研究のために到着したところは古島であった。この古島を行政単位上「巨文理」という。この「巨文理」が日帝時代に日本人が開拓した漁業前進基地である。研究チームは「巨文理」に到着し、「白鳥旅館」に荷をおろした。旅館の人（経営者）に案内してもらい、最初に日帝時代に日本神社があったところへ行って調査をはじめた。

この旅館の経営者は、全羅道の出身なのだが、韓国動乱の時ここに避難してきたのがきっかけとなってここに住むようになったと言う。日帝時代には一九三四年から一九四二年までの九年間日本に住んだ事もあるという。

この人の話しによると神社は一九四二年（昭和十七年）に、鳥居は一九四三年に立てられたと言う。神社の跡と神社へのぼる階段が残っていたが、鳥居は見あたらなかった。鳥居らしい物の一部がこの旅館の入り口のほうに捨てられていたし、別の一部はさんばしに船をつなぐ石の柱として使われていた。神社のあったところから防波堤のあるところへ下ってきたが、その道に南総督の時立てたという防波堤の築造を記念する記念碑が立てられていた。その記念碑の前には「巨文島港修築記念碑」と刻んであったし、記念碑の裏には「昭和二十年十月建之×××」と刻んであったが、だれが削ったかその

次の文字は見えなかった。またその当時この防波堤を立てるのに当たって物質的に献身した人の名前も刻んであったが、だれが削ったかは消えてしまっていた。彼の話しによると韓国人の中でもお金を出した人が一人か二人ぐらいはいると言う。

その当時この巨文島の人達は、韓国本土の人達より日本に行くのがやさしかったと言う。韓国本土の人は日本へ行くためには調査を受けなければならなかったし、旅券を持たなければならなかった。しかしこの人は、旅券なしで日本へ行けたという。勿論調査などもいらなかったと言う。韓国本土の人が日本へいく場合、おじいさんの方から調べて反日思想とか反日感情などの気配がみられたらその人の家族は日本へ行けなかったと言う。

巨文島は水産物のなかでもいりこで有名だった。その当時はたくさんとれたし、味も良かったと言う。ここでとれたいりこはすべて日本へもっていったという。このいりこのおかげで巨文島という島が日本に広く知られるようになったという。

いりこをはじめとして、ここ巨文島でとれている魚は、日帝時代大勢の日本人が渡ってきてから大量にとることができたという。それで韓国の人も魚を大量にとる方法を見習うことができたし、その過程で魚の名前も聞いて覚えてきたと思う。

そこでさんばしを中心に日本語そのものがどのくらい生き残っているか、またどのように使われているかを調査する事にした。調査した結果をみると最初予想した通り魚の名前、船の各名称をはじめとして水産業関係のほとんどの名称が日本語であった。

水産業関係以外の日常生活の中に生き残っている日本語も調査の対象としたが、この島ではそんなにたくさん集める事ができなかった。これについての調査は韓国本土で行う事にした。

この島でさかなの名前、船の名称などについて聞いてみた。そのインフォマントを紹介すると次のようである。インフォマントとしては現在巨文島に住んでいる人の中で日帝時代を経験していない人を選んだ。その中でも特に漁業に携わった経験があるとか現在携わっている人を中心に調査を行った。この条件に適当な人としてJ氏（男、四十四才）とK氏（四十一才）を選んだ。このインフォマントについて具体的に言及すると次のようである。

K氏の場合

氏は全羅南道の木浦に生まれ、十九才の時（一九六八年）麗水に移ってきて軍隊に行く前まで（二十二才まで）電気関

係の仕事に携わっていた。軍隊を終えてからもしばらくはこの仕事を引き続きやっていた。二十五才の時巨文理出身の今の奥さんと結婚した。奥さんが巨文理出身でもあったし、仕事も漁船の電気関係のことであったため今の巨文理の方へ移ってきた。奥さんのすすめもあって移ってきたのである。ここに移ってきてもしばらくは電気関係の仕事をやっていた。今から十五年ぐらい前（一九七七年）からは前の仕事をやめて漁業を営むようになり今に至っている。

漁業と関係ある言葉（主に日本語）は漁業を営んでいる先輩達から習ったし、船のエンジンなどの動力部分の名称は前に電気関係の仕事をしていたとき、聞いて知っていたと言う。

J氏の場合

氏はここ（巨文理）で生まれ育った。親は全羅道の長興というところで漁業を営んでいたが、一九三五年（親が三十五才の時）にここへ移ってきた。氏は十二才の時から親に連れられて船（無動力船）に乗って魚釣りに出かけた。一九六一年（十七才の時）親がなくなつてからは他の人の船に乗り、いわゆる船員生活を始めるようになり今に至っている。魚釣りの技術とその用語は子供の時から（十二才、小学校四年）魚釣りに出ていったため自然に身につける事が出来た。

もっと詳しい事は他人の船に乗った十七才の時から身につけ始めた。特に同じ船に乗っていた三千浦出身の先輩から習った。他に技術関係の用語は親が日本語に達者だったので習うのにそんなに苦勞はなかった。

以上、二人を中心として調査した水産関係の用語と本土で集めた用語を分類し記述すると次のようになる。今回の調査では見あたらなかったが、地域によっては使われていると言うものも書くことにする。またここに載っていない他の専門用語については『日本植民地と文化変容』（御茶の水書房）を参照されたい。

最近、自動車が増えるにつれてそれと関係ある日本語が増えつつある。また、花札が盛んになってきてそれと関係ある日本語式の言葉をよく使うので、その点からもみていきたい。

二 一般生活用語

一般生活用語というのは、韓国の人が普通の生活の中で使う言葉のことを言う。その中に日本語が約一、三〇〇余りある。一九九四年八月十四日の韓国の「東亜日報」によると「光復五十周年、来年行事」という題の記事に、来年の行事のひとつとして生活用語になっている日本語一、〇〇〇余りの言葉を韓国語になおす⁵ということが書かれている。今回の調査と数の面では差があるのは、公式的に認めているものとそ

うでないものとの差かも知れない。

ひとつ断っておきたいことは、一般生活用語と専門用語とに分けた場合、一般生活用語ではないが、特に取り立てて言う必要のないものとか、数の少ないものは一般生活用語のなかに入れることにした。例えば「バネ」という言葉がその例である。その言葉をスポーツ選手はよく使すが、一般の人はよく分らない。

用例の中で、説明のいらぬものと説明が必要なものとがある。説明のいらぬもの、つまり韓国で使われている外来語（日本語）と日本語そのものにあまり言葉の意味で差のないものは、図表でまとめてあらわすことにする。

用例のなかで説明の必要なものは次のようである。

(1) 自動車関係の用語

モドシ：日本語「戻す」から転用した言葉。日本語の「もどす」という言葉は、「車を少しもどす。」とか「時計を十分もどす。」というふうに使って車を後進させるという意味として使われている。しかし、韓国では、そういう意味はまったくなく「もどしてください」というふうに言って車のタイヤをまっすぐにすることをいう。

IPPAI：自動車のハンドルを右とか左に回らないところまで回すことをいう。

ナガシ：日本語の「ながしのタクシー」というときのながしと同じ。

チンパ：日本語の「かたわ」の意味。日本では自動車関係の語としては使われないそうであるが、韓国では自動車関係の語として使っている。

パンク：人によっては、英語式に発音する人もある。

ジョウシ、ジョシ：日本語の「調子」からきている。人によって短く、または長く発音したりする。

(2) 花札関係の用例

ナガレ：だれも決まっている点数に到達出来なかった場合をいう。

ドクダイ：日本語の「特攻隊」の言葉からきている。日本語「とつこうたい」という言葉が濁ったりちぢまって出来た言葉。

ジャブドン：座布団のことをいう。人によっては「ザブドン」というふうにも聞こえる。

ショウダン、ソウダン：日本語の「相談」のことをいう。日本語で書いて「そうだん」になっただけであって、実際の発音を聞いてみると日本語の「そうだん」とは少し違うのである。韓国人がいう「そうだん」は日本人がいう「そうだん」よりその「う」音が少し短く聞こえる。アクセントとか「拍」

ということまでいふときりがないので、そういうことは他のところで述べることにする。

ゴドリ：これは、普通の日本語ではないが、言葉そのものは日本語からきているのでここに書いた。「五」と「鳥」という言葉を一緒にしたつもりで作った言葉。花札をみるとその中には、いろいろの絵が描いてある。その中には鳥の絵もいくつがある。自分が集めてきた花札の絵のなかに鳥の絵があり、その鳥の数が五羽になると勝つという仕組みなのである。

ある統計によると、韓国では六〇%以上の家庭で正月とかお盆などのまつりのとき家族、親戚などが集まって行事をすませたあと花札をやるのだそうだ。花札といってもそのほとんどが「GO STOP」というものをやる。「GO STOP」というものがいつから始まったかよく分からないが、一説によると経済の高度成長を遂げて一般の家庭のなかでも経済的に余裕ができてからだというから七十年代後半か八十年代初め頃だと思う。それにしてもその用語が和製英語であることにびびくりする。この用語は広がりつつある。

(3) スポーツ用語

バネ：この言葉の発音は、日本語とアクセント以外はあまり変わりがない。ただし意味の面では違うかもしれない。

「ばねがいい」とか「ばねがわるい」というふうにつかう。

アミ：テニスなどのラケットのガットのことを「あみ」という。テニスなどをやるとき、非常に打ちやすいボールを空振りすると、「お前あみないか」という。お前のラケットにはガットが張っていないのかという意味。つまりラケットのガットのことを「あみ」という。これは、意味の変化によるものだと思う。あとにもでて来るが、海でさかなを取るとき使うあみと言う言葉が意味を変えて使われるようになったと思う。「あみ」という言葉は海岸地域では普通に使っている。それで、ガットにもそのようなものが張っているからガットのことを「あみ」というようになったと思う。

(4) 生活用語

アダラシイ：日本語の「新しい」という言葉から転じて出来たもの。日本語とほとんど同じ意味として使っているようである。が、この言葉は日本語より広い意味を持っている。韓国では、若いひと（主に男）がよく使う生娘（処女）のことを言う場合が多い。「あの子はあだらしい」とか「あの子はあだらしいか」というふうに使う。儒教の影響の強かった韓国では、処女であるかないかに非常にうるさい。新婚旅行にいてて新婦が処女ではなかったと言つてそのつぎの日に別れを告げる新郎も多いそうだ。これが離婚の理由としていち

ばん多い割合を占めている。

チランシ：日本語と発音も意味も同じ。この言葉も最近流行ったものである。新聞紙に広告用紙を挟んで配るようになってから表れた言葉である。新聞紙に挟んで配る広告用紙のことを「ちらし」という。

祐サン：これは韓国語と日本語が一緒になったものである。韓国語の「祐」というのは、黒いという意味である。つまり「黒いさん」という意味で、顔の黒い人のことをいう。

こういう言葉を混種語というが、混種語の中には「韓国語十日本語」もあるし、「日本語十韓国語」もある。この混種語についても『日本植民地と文化変容』を参照されたい。

このようにいちいち挙げるときりがないので、これ以上のものは表にしてまとめる事にする。

へ一般生活用語

外 来 語	日 本 語	韓 国 で 使 わ れ て い る 意 味
ギス ネジマシ デンブラ チョッキ	傷 ねじまわし てんぶら チョッキ	傷 ねじまわし てんぶら 洋服の上着の中にきる 袖無しの服

ガラス ガラ カド ガダ ガダ ガブシキ ガサリ、ガザリ ガンゾ、ガンジヨ ゲダ ゲント ゴウバイ ゴツケイ ゴンロ ゴンジョ、ゴンゾ グルマ ギリカイ グロジ クセ ナシ	ガラス カラー 角 型 肩 株式 飾り 勘定 下駄 見当 勾配 滑稽 焔炉 根性 車 切り替え 黒字 癖 無し	ガラス カラー 角 型 肩 株式 飾り 勘定 下駄 見当 勾配 滑稽 焔炉 根性 車 切り替え 黒字 癖 無し(仮名は同じですが、 アクセントの面から言えば 日本語の「梨」のように聞 こえる)
ギマイ ダテカイ、ダテカイ ダライ ダマ	気前 立替 盥 玉	気前 立替 盥 玉

ダンドリ	ダンス	ダンス	仕事がおわった時、その現
ドッキリ、ドクリ	とっくり、とくり	場の点検のことを言う	
ドクイ	得意	鈍子のことを言う	
マイガリ	前借り	得意	
バリバリ	ばりばり	前借り	
パンカイ	挽回	ばりばり	
サカダチ	逆立ち	挽回	
サラ	さら	逆立ち	
サラシ	さら	さら	
サンポ	晒	さら	
シンピ、シンピン	散歩	晒	
センヌキ、センドキ	新品	散歩	
スリ	栓抜き	新品	
スリバ	すり	栓抜き	
スルメ	スリッパ	すり	
サシミ	鯛	スリッパ	
サクラ	刺身	鯛	
サギ	さくら	刺身	
スメキリ	詐欺	さくら、はったり屋	
シロド	爪きり	詐欺	
シマイ	素人	爪きり	
シアゲ	終い	素人	
シンガダ	仕上げ	終い	
アカジ	赤字	仕上げ	
アダリ	当たり	赤字	

アダマ	頭	頭	
シダ	下	下	
アッサリ	あつさり	あつさり	
アイノク	合いの子	合いの子	
ヤミ	闇	闇取引	
オコシ	おこし	おこし	
オモリ	重り	重り	
オモチャン	玩具	玩具	
ワク	粋	粋	
ワリ	割	割、割合	
ワリカン	割り勘	割り勘	
ワイロ	賄賂	賄賂	
ヨビリン	呼び鈴	呼び鈴	
ヨシ	よし	よし	
ウキ	浮き	浮き	
ユドリ	ゆとり	ゆとり	
イカ	いか	いか	
イッパイ	一杯	一杯	
ジャンケンポイ	じゃんけんぽん	じゃんけんぽん	
ジョシ	調子	調子	
ジョウバ	帳場	帳場	
ハコ	箱	箱	
ホオダイ、ホウダイ	包帯	包帯	
ヘラ	へら	へら	
フミキリ	踏切	踏切	
ヒマ	暇	暇	
ヒヤカシ	冷やか	冷やか	

ヒヤシ アミ チンバ ナラビ、ナレビ ガミソリ ゴデ バリカン フカシ ガク、ギヤク ヤキマシ ハバ シボリ ネジ ノリカイ ガダマイ ギジ ドクリ マドメ モンペイ ソデ ソテナシ シチブ シン エリ オバログ、オバロク	冷やし 網 ちんば 並び 剃刀 こて バリカン ふかし 逆 焼き増し 幅 絞 ネジ 乗換 片前(服の一種) 生地 とつくり(セーター) 纏め もんべ 袖 袖なし 七部 しん 衿	冷やし 網 ちんば 並び 剃刀 こて バリカン ふかし 逆 焼き増し 幅 絞 ネジ 乗換 片前(服の一種) 生地 セーターの一種 纏め もんべ 袖 袖なし、略して「なし」と 言う場合もある 七部袖 上着の肩のところに 綿のようなもの 衿 縫い方の一種
---	---	---

ウラ ウラカイ ウワギ ジジミ ハチブ ハンソデ ハンスボン ホク ブンバイ ガマボコ ニンジン タカン、タクアン ダマネギ ダシ ドンカス ミカン ベント センペイ シナナバ アンコ ヤキイモ、ヤキモ オボン ワルバシ、ワリバシ ヨオカン、ヨウカン ヨウジ、ヨオジ ウドン リアカ	裏 裏変え 上着 縮織 八分 半袖 半ズボン ホック 分配 蒲鉾 人参 たぐあん 玉ねぎ 出汁 豚カツ 蜜柑 弁当 煎餅 餡 焼き芋 おぼん 割り箸 羊羹 楊子 うどん リアカ	裏 裏変え 上着 縮織のこと 八分 半袖 半ズボン ホック 分配 蒲鉾 人参 食べ物 玉ねぎ 出汁 豚カツ 蜜柑 弁当 煎餅 しななっぱ(野菜) 餡 焼き芋 いれもの一種 割り箸 羊羹 楊子 うどん リアカ
---	---	---

三 水産関係の用語
(1) 魚等の名前

外 来 語	日 本 語	韓国で使われている意味
ヤス モジャク アナゴ イルコ ブリ イカ サバ サンマ アジ アジゴ ジヌ ホシガリ	やす 穴子 いりこ ぶり いか 鯖 さんま あじ ちぬ ほしかり	やす やすの子 穴子(あなことはいわない) いりこ ぶり いか 鯖 さんま あじ 鯆の子 ちぬ あらかぶのことであるが、 対馬の周辺ではほしかりと いうらしい
イシダイ アカダイ クロダイ、クロダイ バカダイ オオダイ	いしだい あかだい くろだい	いしだい あかだい くろだい 非常に大きいたいのことを いう ちよっと大きいたいのこと をいう

(2) 船の名称

外 来 語	日 本 語	韓国で使われている意味
ドモ オモカジ トリカジ アンカー ドラムカン スギ モヤ ミヨシ ゴモチ ビム デッキ	とも 面舵 取り舵 アンカー ドラム缶 杉 もや みよし こもち ビーム デッキ	とも 面舵 取り舵 アンカー ドラム缶 杉 船を止めるロープ みよし 船のしたに敷く木 ビーム デッキ

ジユウダイ ゴダイ スゴ ヒラス ヒジキ	きすこ ひらす ひじき	中位のたいのことをいう (「じゅう」は「ちゅう」 の間違い) 小さいたいのことをいう きすこ(東海岸の九龍浦周 辺では「きす」こともいう) ひらす(巨文理ではひらす を養殖し、30cmぐらいにな ると全量を日本へ輸出する) ひじき
----------------------------------	-------------------	--

チンバ オモリ ウアダナ ナカダナ シヤク	ちんば 重り 上棚 中棚 しやく	ちんば 重り うわだな なかだな しやく
-----------------------------------	------------------------------	----------------------------------

(3) 網の種類

外 来 語	日 本 語	韓 国 で 使 わ れ て い る 意 味
サシアミ ヒキアミ ナガシ ソコビキ	さしあみ 引きあみ 流しあみ 底引きあみ	さしあみ ひきあみ 流しあみ 底引き網

今回調査したものは以上である。

一般的に外国語が入ってきて外来語になるときは、その言葉がそのまま受け入れられる場合もあるが、大抵はその国の言語構造に合わせて定着するようになる。今回収集した言葉は語形変化の面からみると次のようになる。

四 語形変化

一般的に語形と言う場合、単語が発音される形を意味する。今回の調査のなかで日本語との発音の差が大きいものが見られる。図表にも表れているように語形がもとの日本語より短くなっているものもある。長音が短音になっているものもある。

る。清音が濁音になったものもある。「り」音が「る」音になっていものもある。「ち」音が「じ」音になっているものもある。「じ」音が「ず」音になっているものもある。「い」音が「え」音になっているものもある。「ちゅ」音が「じゅ」音になっているものもある。その他にも色々ある。こういう事は、異文化との接触によって文化変容とともに言語的交渉が行われたことを意味する。

五 おわりに

以上見たように一般生活用語及び水産関係の用語の中には、日本語からきているものが多い。その中には意味が変わっているものもあるし、語形が変わっているものもある。意味と語形が一緒に変わっているものもある。

発音の面から見て特徴的なのは、日本語の語頭の清音がほとんど濁音になるということである。それは韓国語には、清音と濁音の区別があまりないからではないかと思う。つまり頭の文字を清音に発音しても濁音に発音してもその言葉の意味があまり変わらないのである。

本来外来語というものは、異なる言語を使う異民族と接触すると文化的な交渉とともに言語的な交渉が行われ母国語の固有の言語体系にあわせて受容するのが一般的である。しかし我国の場合は事情が異なる。日帝時代を通じて正常でない

状況の中で私達は、日常語として日本語を使うように強要された。また韓国固有の言葉は出来るだけ忘れるようにと教育された。その結果解放後（終戦後）五十年あまりたった今でも日本語が各分野で使われている。またそのような教育のため韓国語に日本語がとって換わったものもある。そのせいか日本式の言語表現がたやすく受け入れられる傾向にある。その例として挙げられるのは自動車関係の用語である。自家用の自動車がふえ、それにつれて日本語の用語もふえる傾向にある。また建築関係の用語にもこのような傾向が見られる。全国的に盛り上がる建築ブームにのって日本語の用語が広がりつつある。

解放後政府と学会などの努力によって外来語のなかで日常生活用語は、ある程度固有語に取り替えることができた。しかし単純労働に携わっている人々は日本語を使っている。中には自分が使っている言葉が日本語であることも知らずに使っている人もいる。主に単純労働に携わっている技能工の技術用語の習得の過程をみると彼らは、先輩技能工の使っている言葉を使うようになる。彼らは先輩から技術とともに技術用語も伝授されるようになる。このような一連の伝授の過程を通じて彼らなりのアイデンティティーを形成する。こういうことは組織社会において非常に重要な役割をはたす。お互いの紐帯を強化する力になる。これを無視あるいは破壊しよう

とする行為は絶対に許されない。そのためかこういう労働者たちが使っている言葉（日本語）には生命力がある。

来年「光復五十周年」の記念行事の一環として「生活用語になつている日本語」をどういうかたちで変えるのが注目される。

〈李 庸憲〉啓明大学校 日本学科 助教授

注

(1) 李相五 一九八五 「旧韓末開化期の日本語流入過程について」『人文研究』大邱市、二五頁。

(2) 前掲書 二六頁。

(3) 韓国では、一九一〇年―一九四五年の期間を植民地時代と呼んできた。しかし最近になって「日本帝国主義強制占領期」という言葉の略である「日帝強占期」という言葉が流行っている。

(4) このインフォマントの身上に関することは、同じ研究の仲間の協力を得て書いたものである。(一九九一年十二月二十五日調査)

(5) 『東亜日報』(一九九四年八月十四日。)

参考文献

姜 信沆 一九八一 「外来語化したいいくつかの語例について」『京畿語文学』第2輯、ソウル

- 李 徳奉 一九八四 「国語のなかの日本製外国語」『日文学報』
第十三輯、ソウル
- 金 慶漢 「外来語使用問題に関する一考察」『国語国文学』六
七、ソウル
- 横山景子 一九八二 「韓国の外来日本語に対する研究」『人文
研究』第3号、嶺南大学 大邱市
- 兪 萬根 一九八〇 「外来語強化政策論」『東大論叢』第一〇
号、東徳女子大学 ソウル
- 兪 萬根 一九八〇 「外来語受容方式に関する考察」『語学研
究』第十六卷、ソウル大学校
- 金 信 一 一九七四 「日本語系外来語使用に対する調査研
究」啓明大学校教育大学院 修士論文 大邱市
- 金 平卓 一九八八 『建築用語大辞典』枝文堂、ソウル